

《正岡子規（36）の続き》その313

天涯茫茫生

列伝⑦ 岡 麓 の続々

この日、麓は病気を押して来会したので、散会後子規は、麓宛に特に手紙を書き、病中の来会を謝すると共に、病中の摂生法を記述した。そして俳句をも添えている。

草庵の煖爐開きや納豆汁

発信は11月30日で、煖爐開きの翌日であるが、執筆は29日で、散会後喰い過ぎて寝られぬままに用事はないが書くとしているが、実は料理がいかにも辛く、咽喉かわいて堪えず、密柑ほしくてほしくてせん方なしであるが、夜も更けて買いに行くところもないと家人に断られ、やむを得ず塩湯を飲み、紅茶の出流れの渋いのを砂糖なしに飲み、遂には冷水を飲んでもおさまらず、麓宛の手紙を書いたのだ。

左向に寝て書いたところ腰が痛くてたまらぬからこれでとあるが、今夜は密柑の思いにて眠れまじく候」とあるのが本音らしい。子規にとつては食べることが病苦を医することであった。

書簡番号 958 33年12月24日発

「やま會廿七日の事 前日廿六日と申上候は誤」

やま會とは写生文の文章会のこと、この年初秋に始まった。

書簡番号 977 34年1月15日発

「昨日八種々御馳走に相成面白く楽しかりし由御礼申上まいらせ候

春木座へさそはれ行やはつ芝居

上根岸 正岡子規

春木座の初芝居に、母と妹が麓に招かれて見に行つたのであらう。その礼状である。当時の春木座の俳優と出し物がなんであつたかは、今の小生には探求の道がない。看病に疲れた家人には、さぞ楽しかつたことだらう。

書簡番号 986 34年2月初旬発

「来る七日夕刻より山会二付山二つ持参の事」

山会のために山の二つある原稿を持参してほしいとの文面。

書簡番号 1045 35年5月9日発

「奥州からもらひし鯛岡様へあげんと内の者は申候、何の面白味もない贈物をわざわざ

君の内へ持て行くにも及ばずと申候へども内の者きかず依て別封の如し

麓様 規イヤイヤ書

三尺乃鯛や蠅飛ぶ台所」

陸前石巻から大鯛三枚氷につけ贈りこしければと「病臥慢録」にある。麓の書いたものによると三尾のうち一尾を左千夫に、一尾を自分が貰つたという。

子規がイヤイヤ書いたとは、三尾とも自分が食べたかつたのか。喰意地の張つた子規のことだからそうともとれる。

書簡番号 1099

これは「書簡二」の補遺の部にあり、麓によると明治33年4月に送られたもので、長歌の歌稿という。

前回、書簡番号873の内容が解しかねるとしたが、講談社版「子規全集」第12巻随筆二の578頁にその解説らしい記事を見出した。

「根岸座芝居番附」として、麓以下12名の歌人の名を上段に並べて花の名（例えば麓を茶室の紅白のバラ、秀眞を天の香見山の眞神、下段に忠臣蔵の配役麓は一力亭主塩屋判官、秀眞は勘平と足利直義とするが如しである。大星由良之助は希望者多く、衆役者一日代りに相つとめとある。

（この項終り）